



Title	三好達治文学における政治性と詩觀：朝鮮の放浪詩人・金笠批評を通して
Author(s)	朴, 相度
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51193
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	朴相度
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(言語文化学)
学位記番号	甲第58号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	三好達治文学における政治性と詩観 ——朝鮮の放浪詩人・金笠批評を通して
論文審査委員	主査 教授 尾上新太郎 副査 教授 森藤一史 副査 助教授 岸田文隆 副査 教授 米井力也 副査 教授 平田由美

論文の内容要旨

0、はじめに

本稿は、朝鮮の放浪詩人金笠の批評を通して、三好達治文学の政治性と詩観を研究するものである。本研究には、三つの目的がある。第一は、「三好達治文学の政治性」を明らかにすることである。第二は、「三好達治文学における政治性と詩観の原型」を究明することである。そして、第三は、「三好達治文学の政治性と詩観の関連性」を考察することである。

三好文学の政治性は重層的な構造を持っている。その重層的な構造の中に、詩観との関連性も絡んでいる。このような三好文学の政治性を究明するためには、多角的な立場からの考察が必要である。例えば、三好文学の政治性が最も、端的に表れた戦争詩だけを取り上げて、三好文学の政治性を語ることは意味を持たない。

本稿では、多角的な立場から三好文学を考察するため、「金笠批評」を取り上げている。その理由の第一は、三好の金笠批評の文章「漂泊詩人金笠に就て」には、三好の政治性と詩観が混在して表れていて、三好文学の政治性と詩観を考える上で、重要な手がかりを提示してくれているからである。第二は、三好が批評している金笠という人物は、政治的な面と詩観の面において、象徴的な意味を持つからである。本稿は重層的な意味を持つ本稿のテーマの問題を解決するために、多角度的な視点での接近を試みている。

1、三好達治の金笠批評

三好の金笠批評文「漂泊詩人金笠に就て」(『屋上の鶏』文体社、1941年)は、朝鮮の代表的な放浪詩人金笠の人と文学に対しての感想と意見を記したものである。この文章は朝鮮訪問を終えた後

に、『文学界』(4, 5, 6, 8, 10号、1941年)に連載したものを集めたもので、詩人三好の文学的な特性を伺うのにふさわしいものであると言える。三好の金笠批評文「漂泊詩人金笠に就て」に初めて接したとき、誰もが三好の厳しい詩観を考える。それは、三好文学が持つ根強い伝統主義と定型主義を知っているからである。しかし、「漂泊詩人金笠に就て」の中には、三好文学の政治性が、密かに隠れている。

三好以外の日本知識人達の金笠評価は、金笠文学の政治性を指摘する点で共通している。そして、その文学の政治性というのは、破格詩の形で表れていることを彼らは、見逃していない。ところが、彼らは、三好の厳しい批評と違って、一定の評価を下している。この評価の違いは、三好文学の政治性が持つ独特な性質に起因するものと言える。

2、金笠文学の特性—政治性と詩観

金笠文学は、当時の支配権力に抵抗する傾向を持っていたということで、政治性があったと言える。また、そのような政治性が具体的に詩作において表出されて、戯作詩、破格詩、ハングル詩などを生み出したのである。しかし、金笠文学の政治性は、金笠文学の性格を決定付ける重要な要素であることは間違いないが、金笠文学の根本がここにあるとは言い難い面がある。金笠は、支配権力を揶揄し、批判しながらも彼らとの直接対決は避けた傾向がある。金笠の体制批判というのも、文学の領域で昇華した形で表れたものであると見るのが妥当だと思う。しかし、時代の中で、金笠のこのような面が見過ごされて、無視された事実がある。金笠の批判論者の主な主張は、金笠が正統な漢詩を無視して、破格詩を書いたということである。彼らは金笠を酷評して、低俗だと言っている。ところが、彼らが批判している本当の理由は、金笠の戯作詩やハングル詩が、詩の格調を引き下げたという事もあるだろうが、何より彼らの既得権を批判し、挑んできたということにその本当の理由があるのではなかろうか。即ち、金笠文学の政治性を批判しているわけなのである。

3、金笠批評に表れた三好達治文学の特性

金笠批評の根底にあるものとして三好は、「平凡性」「破格性」「戯作性」「体制抵抗性」を取り上げている。三好は基本的に伝統的な漢詩の範疇を外れる金笠文学を冷たい目線で捉えている。そしてそのような金笠文学の定型漢詩からの逸脱を反体制的なものとして理解した面もある。

三好の詩観と政治性という側面を考える時、伝統主義に強く固執した傾向が感じられる。しかし、その伝統主義にはリアルな歴史性は感じられない。詩の概念の中で人間社会の矛盾をまともに受けとめる現実感覚が三好の詩には欠如していたように思われる。というのは、三好には激変期である朝鮮末期の時代状況への理解を示す姿勢があまり見られなかつたし、金笠詩の政治性に対しても詩の品格という一つの観点だけに固執したからである。そして三好は植民地朝鮮と金笠に対する認識について、脱植民地的な包容性を見せなかつた。寧ろ、ある程度の政治的なスタンスを堅持していたように思われる。このような意味で、三好文学には政治性がある。しかし、先にも触れたように三好の詩自体には政治性が欠如した面もある。だから、三

好文学は、政治性という観点から論じる時、一概には言えない複雑な性格を持つものであると言える。

4、三好達治文学における政治性と詩観

戦争期と戦後の一連の軌跡を通して示された三好文学の政治性は以下の通りである。第一、三好は体制の内に存在した傾向がある。戦争詩を本心から書いたのは、他の転向作家達とは違って、体制自体を無意識的に肯定したからである。さらに戦後の天皇批判をはじめとする戦争責任論と社会現実への認識と関わる三好の姿を見る時、体制内にだけ関心が注がれていて、民衆を振り返る余裕がなかった。第二、三好の個人的な政治性向は、日本国に対する愛着から表された傾向がある。戦争期の戦争詩の内容と国民詩に対する信念、戦後の日本社会への鋭い批評と責任論の追及、このような一連の政治的な言動の裏には、日本国に対する深い愛着があった。次に戦争期と戦後を通して表された三好の詩観の特性は以下の通りである。第一、三好は根強い言語意識の所有者であったらしい。戦争詩を書く時も、三好は詩語の選別に細心な注意を払ったことが分かる。第二、三好は抒情と美感を重視した。しかしこのような三好の詩観の特徴は、現実認識という観点からは批評される恐れを持つものである。このような三好文学の政治性と詩観は、戦後間もないうちに批評されるようになる。抒情趣味の側面からは、「近代的知性の欠如」「無批評」「現実逃避」などの批評があり、文人趣味の側面からは「現代詩との不調和」「形式美の問題」「戦争詩の文人趣味」などの批評がある。

5、三好達治文学の構図

「三好達治における戦争」というテーマに限って言うなら、一貫して三好は、政治論理と絡んでいる戦争の本質を自覚していなかったと言える。幼い時から三好の脳裏に刻まれた国家に対する順応的価値観は、戦争を個別の単位概念として認識することを許さなかった。戦争の現実を見ながらも、「戦争と文学」、「政治と文学」の区別を自覚しない性向から、三好は戦時期に文学性の高い作品を書いたし、戦争詩においてもその文学的な力量を発揮したのである。三好における、「戦争と文学」、「政治と文学」の区別の曖昧さは、二つの傾向をもたらすが、その第一が、「文学主義の優越性」であり、第二は、「無思想性の傾向」である。「三好における戦争」もしくは、「三好における政治」という問題は、このように克明に意見が二つに分けられる様相を見せている。日本の詩壇は、前者に傾倒してきた傾向がある。後者に対する立場を表明していた人たちは、第4章で語った少数の批評論者に限られるのが現状である。このような意味で「三好の思想性」は、三好の「戦争と文学」「政治と文学」の関係の構図を理解する上でヒントをくれると言える。そのヒントとはある意味で「三好の思想性」は思想の本質を避ける傾向のものであるという意味のものである。

6. 結論

三好文学の政治性と詩觀は、全く別個のもののように思われがちだが、それが三好の愛國心を媒介にする時、一つになれるということが分かった。この部分が理解できないと三好の戦争詩執筆の動機をはじめ、戦後見せた「天皇退位論」が理解し難いだろう。本研究の考察の結果、伝統の抒情詩人として一般に認識されてきた三好の既存のイメージに「愛國詩人」というイメージが加わることになるのだが、その「愛國詩人」という言葉の理解も政治性の觀点からの理解が欠如しているなら、まともな理解とは言えないだろう。

このように三好文学の政治性の検討が可能だったのは、金笠批評を媒介にしたからである。戦後の間もない頃を含めた日本詩壇の全体の雰囲気は、三好研究において新しい尺度を当てる許さなかった傾向がある。これは戦後、一時的かつ同時的に行なわれた三好関連批評が、詩壇の注目を引かなかったことからも分かる。しかし、本研究では、既存の研究範囲という枠を超えて、特殊な時期、特殊な人物即ち、植民地時代の朝鮮の放浪詩人・金笠を考察の対象とした。三好文学に潜んでいるがなかなか表面化して論じ難かった政治性という問題に対して金笠を通して語ることによって、一定の結果を導き出したという点は本研究の成果であると言える。

しかし、三好文学を政治性という觀点から語ることがこの論文の最終の目的ではない。それは「政治と文学」という二項対立の論議は、過ぎ去った時代の古い論争の材料であると思うからだ。本研究で三好文学の政治性を問題提起したのは、三好という人物を理解する核心の道を提示したいという思いがあったからである。既存の三好理解が本質に気づかないままなされている傾向があると判断したからである。今後の課題は、このようにして明らかになった三好文学の政治性という問題を既存の成果との調和の中で、どのように位置づけるかということであると考えられる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、詩人・三好達治（1900年—1964年）における、詩と政治との関係について考察したものである。その一環として、三好の詩觀に関する考察も行っている。

方法論としては、朝鮮王朝末期の放浪詩人、金笠（1807年—1862年）に対する三好の批評—『屋上の鶏』。特に、その中の「漂泊詩人金笠に就て」一を取り上げ、言わば逆算する形で、三好の政治性・詩觀、両者の関係、これらに関する考察をするというありかたをとっている。

戦争中、三好は、いわゆる戦争詩を書き、戦争を行っている自国・日本国家に対して、協賛する態度をとったとされる。当時の国策に適った詩で、それらはあったわけである。それらには、人間社会の葛藤が出ていないとか、花鳥風月的に戦争を扱っているという批判も出されている。戦後、三好という詩人を理解・評価する上で、このことは、一つの難点になっている。時勢に流され、戦争詩を書いたとか、国家権力に迎合したという考え方もある。三好達治の本質的な非政治性を言う人もある。

しかし、論者は、三好達治という人間の本質の中に、言うところの戦争詩を書く要素が強くあったのではないかと考え、考察を進めている。このことは、三好の政治性と一緒に考えなければならない問題だが、この点、論者は、『屋上の鶏』を細かく分析し、三好における、政治性、詩観、両者の関係、これらに関する考察を緻密に行なっているわけである。

三好は、昭和16年（1941年）、朝鮮を訪れ、金笠の詩や、朝鮮の民衆にふれ、同年、雑誌『文学界』にそれらについての批評を連載した。昭和18年（1943年）、それらの批評を一書にまとめ、『屋上の鶏』と題して刊行した。（因に、三好のその時の朝鮮訪問は、二度目で、一度目は、大正9年、1920年、のことである。当時、三好は、陸軍中央幼年学校の生徒だった）。

当然、論者は、金笠の伝記や詩について、通じているものでなければならない。また、金笠における詩と政治との関係についても、詳しい知識がいるだろう。これらについて、当然のことながら、論者自身も問題をいだいている。論者は、金笠の生きた時代の、つまり朝鮮王朝末期の、社会事情を考察し、また、当時の詩壇の状況についても、考察しているのである。過去にどのように金笠という人間、乃至、その詩が評価されてきたかという問題も、つぶさに考察している。また、金笠の詩の特徴の細かい分析も行なっている。これらを通し、金笠の、人となり、伝記・詩の特徴、金笠における詩と政治との関係、これらについて詳しく考察しているのである。

金笠は、その内心において、当時の支配権力に対して、抵抗意識をもっていた、換言すれば、金笠は、ひそかに民衆の立場に立って、詩作をしたのである、と論者は言う。そして、そういうところに、金笠の詩の政治性を認めることができる、と。また、金笠の破格詩・ハングル詩・戯作詩を理解する場合、そのモチーフに、民衆の立場に立つという観点が入っていることを見落してはならないと言う。金笠は、伝統主義者ではなかったわけである。

もっとも、論者は、金笠という人間、乃至、詩の本質ということで、超俗性ということも説いている。尖鋭に、ある特殊な政治的立場から詩作をした人でもなかったというわけである。こういうところに、論者のパースペクティブなどの見方が指摘され、論述を説得力のあるものにしている。

ところで、三好達治だが、彼は、金笠の詩を主に品格の面から見、低い評価しか与えなかった。（例えば、金の戯作詩の題材はごく卑近なもの）。逆に言えば、このことは、三好達治がどういう詩人であったかを伝えるものである。三好は、高尚な抒情詩人・自然詩人だった。本質は、破格を嫌う伝統主義者だった。人間社会の矛盾にきちんと目の行くような人ではなかった。朝鮮末期の時代状況にきちんと目を向けるというような人ではなかったのである。そういうことで、三好の非政治性を論者は、指摘している。

ただし、三好には、帝国主義国家の国民詩人という意識があり、自国・日本国家優越主義という立場から、当時日本の植民地だった朝鮮に対して、そういう姿勢のうちに、彼流の、手前勝手な政治性を指摘することはできる。このようなことも、論者は言っている。このことは、自国・日本においても、三好達治という詩人が民衆の立場から詩作をした詩人ではなかったことをうかがわせるものもある。

では、戦時中、三好達治が戦争詩を書いたのはどうしてか。三好は、時勢に

迎合したわけでも、政治思想として、全体主義的な国家中心の生き方を考えていたわけでもなかった。三好は、その心情において、強烈な愛国者だったのである。このことが、要するに、三好に戦争詩を書かせたのである。特に政治的な意図があつてのことでは、なかつたのである。

以上のようなことを論者は言つてゐる。これに対し、以下のことと言えるだろう。当時の日本国家は、国民国家だった。今もそうだが。国民国家の国民という立場からするなら、国家が行つてゐる戦争に対して協力するというのは、論理的にも感情的にも、出易いことではないのか。それなら、三好は強烈な愛国者だったという話は、問題の始まりとも言えるのである。人間には、個人的立場というものもある。この個人的立場こそ、文学者の立場である。そこには、事実問題として言つても、理論的に言つても、大変、孤独な問題があるのだが。この個人的立場という観点で、三好達治を見た場合、どういうことになるのか。三好は、そういうことでは、どう自己規定したのか。次の段階では、こういつた問題も考えて欲しい。

また、戦争詩を論文として扱う上での基本的な文献にはどういうものがあるか、という問題も考慮して、研究を進めるべきではなかつたか。また、近代の日本の詩人の中にも、ごく卑近な素材を用いて詩作をした人がいる。三好はそれらの詩人にはどういう評価を下しているか。このことも踏まえ、考察すべきではなかつたか。また、論文中の用語の概念規定をもっと明確にしておく必要があったのではないか。

審査の過程で、審査委員会の委員の間から、以上のような提言・批判も出されたが、詩人・三好達治における詩と政治との関係を考察するという課題を、三好の金笠批判から逆算するという形で追究している点、方法論の点で独自性が見られ、また、説得力のある論を展開している。これらからして、確かに、三好達治研究に新たな1ページを加えているとされる好論文である。

私たち委員は、金笠の詩の本質をきめ細かく追究し、解明している点、等も加え、総合的に判断した結果、全員一致して、博士号（言語文化学）に値する論文と判断した。